

# 注目される共用品思想

大熊 由紀子 国際医療福祉大大学院教授



—中村藍撮影

## くらしの明日

私の社会保障論

超高齢社会に不可欠な「共用品」。「共用サービス」の思想が注目されています。誰もが使いやすい「モノ」や「サービス」を表す思想です。あらゆるさまざまな「高齢者用」「障害者用」に見えない、さりげなさが身上。使う人の誇りを傷つけることはありません。共用品の始まりは「共遊玩具」でした。目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりする子どもたちが、目や耳に

不自由のない友だちと一緒に遊べるおもちゃです。玩具メーカー・タカラトミーで始めたこの試みは、他のメーカーや海外にも広がり、世界共通のマークもできました。目が見えない子と一緒に遊べるのが一目で分かる「盲導犬マーク」、耳の聞こえない子が一緒に遊べる、耳の大きな「ウサギマーク」です。このような考え方に共鳴した人々が出会い、91年に誕生したのが「E&Cプロジェクト」です。Eはエンジョイメント、Cはクリエイションの頭文字。参加資格は個人ですが、メーカー、教育、行政、サービス業など、職種はさまざま。障害者や高齢者の困りごとに寄り添い、特技を發揮

## 誰にでも便利、急速に広がる

する中から、次々と製品やサービスが生まれてきました。

例えば、目が見えない人が、シャンプーの容器に輪ゴムを巻いてリンスと区別していたのをヒントに、容器の側面にギザギザをつけるアイデアが生まれました。ただ、ギザギザがリンスについているか、シャンプーについているかがメーカーごとにバラバラだった。消費者は困惑します。そこで、業界全体で共通のルールをつくる話がまとまりました。

髪を洗う時には、誰でも目をつぶります。見える人にも見えない人にも便利な「共用品」が誕生したのでした。

この思想を取り入れた製品やサービスが市場に出回ることを目標に、99年、財団法人「共用品推進機構」が設立されました。企業も関心を寄せるようになり、ソニーは指先

の力が弱い人でも操作しやすく、耳が聞こえにくい人にも便利なラジカセを開発しました。TOTOが障害者のために開発した温水洗浄便座は、障害がない人にも便利なので急速に普及していきました。

内閣府の障害者政策委員会が昨年暮れにまとめた「意見」にも、日本生まれのこの思想が盛り込まれました。

社会保障制度改革国民会議が、新政権のもとで近く再開されます。「給付と負担の見直し」のような狭い枠組みにとられない、視野の広い改革論議が期待されます。

年齢や障害といった縦割りを超えて制度を共用化し、必要な支援を届けることを「普遍主義」といいます。誰もが実感できる制度にすれば、税金などの負担が増えても、満足感が得られるのではないのでしょうか。

普遍主義と共用品思想  
日本の消費税率5%に対し、北  
欧・西欧では20〜25%と高いが、  
これらの国には「税金をとられる」とい  
う日常語がない。払った税金が、一般の  
家庭に教育や保育や医療や福祉のかたち  
で戻ってくる「普遍主義」の政策がとら  
れているためと考えられている。利用す  
る人の誇りを大切にすることも、普遍主義  
と共用品思想は共通している。